共産同政治機関誌　　昭和47年7月15日

1・KOT

第16号

6・14 共産同政治集会　特集号

☆権力闘争の時代の陣型構築に向けて　松本礼二
☆60年ブンドの歴史的意義　浅田光輝
☆砂川からの闘争報告　宮岡政雄
☆新左翼運動の危機と安保ブンドの意味　島成郎
☆70年代権力闘争を闘い抜く革命潮流の形成へ

共産同再建準備委員会書記局

共産主義者同盟（再建準備委員会）

権力闘争の時代の陣型構築に向けて

松本礼二

本集会に結集した革命的労働者、先進的学友諸君、農民、市民諸君、共産主義者同盟を代表し、本集会の基調を提起したいと思う。

われわれ共産主義者同盟は、60年安保粉砕斗争の過程で権力の悪逆な手で同志樺の尊い血が流れたことなどの十数年、片時たりと忘れはしなかった。権力との実鋭な対決は、暴力斗争として斗われることを、60年安保の斗いはすでに明らかにしていた。だからこそ、そうであるが故に我々は、「6・15」を単なる記念日としてではなく、斗いの日として設定しとりくんできた。ある時は党派の囲いこみ集会に対して、ある時は集会の指導権争奪の希少な集会に対して行動を対置してきた。

68年には6・15東大安田突入をもって来るべき日本階級斗争の予見を提起することによって、又69年には、70年安保を権力と真向から対決する斗いとして総ての力を結集して斗うべく陣型形成の第一歩を提起し、69年6・15集会を成功させ、あの巨大な人民の力を結集し、自らの責任を果してきた。これは人民大衆が権力と斗う決意をした瞬間に、小さな思わく政治（各派の勢力争いなどの）としてふっとばされてしまうという階級斗争のダイナミズムの一つの証しを見せたのである。かかる6・15を我々は一般的記念日としてではなく、70年代に向けての斗いの出発の日として、十数年の総括として斗いの方向を明らかにしなければならない。

我々は、67年10・8の斗いから、「国際主義と組織された暴力」として70年へ向けた方向提起をおこなってきた。68年の斗い、大衆的実力斗争、大衆暴力斗争の方向を70年安保粉砕の斗いへの組織化を「中央権力斗争―マッセンストライキ」として提起した。

この方針は単に行動型態には止まらない。何故なら、「マッセンストライキ」は現在進行している権力の支配に対する反抗のエネルギーを、大衆暴力を、革命の暴力へと組織することであり、大衆的政治意志の結集としてまさに権力斗争の方向を示したものであった。

67年～69年と斗いが発展し形成されたときこの斗う組織は反戦、全共斗として組織された。それは大衆的戦斗機関であり、自国帝国主義の打倒を内包した政治意志をもって組織を拡大しっっあった。しかし69年6・15に結集した巨大な大衆のエネルギーは69年秋の斗いにおいては、我々が意図し、我々が提起した通りには進行しなかった。権力が社会再編と反革命弾圧包囲網の組織化を全力量をあげて追求することに対し、我々の戦線の側は党派の軍団形成へ、大衆のエネルギーを放置するという、むしろ後退した局面を現出し、大衆の力を政治過程に登場せしめ、権力と真向から対決するという政治構造を組織し立ち進むことができず、政治的敗北を喫した。

それ以降の諸局面については改めてふれるまでもなく、この場に結集した人たちが政治過程であれ、政治的斗いであれ、職場における斗いであれ、後退を余儀なくさせられてきた。この局面からの脱出を、69年の敗北を、ただ軍事的敗北としてで総括してきた部分は、一途に軍事武斗路線を直進した。この路線の最も正直な行動者が「赤軍派」の諸君たちであり、その他の諸君達は「言葉と行動」が民同よろしく「本音とたて前」の分離を露わにし、それを白日の下にさらした。こういった事態の進行は、あらゆる大衆組織を党派的に分解する行為が日常化し、階級の利害よりも党派の利害を先行させるという堕落した状況を作っている。これらの諸君達は、「革命の事業は大衆の事業」といい切らない諸君達は必らず分裂少数派、少数であるが故に最も真険に斗いを考える部分であるし、量的少数派から運動の多数派になる自己の能力が問われていることを確認しておかなければならない。

労働者の管理に対しての斗いの方向という問題で考えた場合、第二の問題はこの間の地域住民斗争の斗いをどの様に私達は評価し、自らの責任として斗いにとり組むかということである。60年代末まではメットをかぶったのは第一線でそれに従うのが第二戦線、地域でそれにシンパシンを感じるのが第三戦線でそして改良要求で行動をおこすのが第四戦線である、と区分けがされていた。今もってこのことは変ってはいない。何故かといえば、ある諸君に言わせれば、三里塚の斗いは農民運動だといい、川崎や横浜における新貨物線の斗いは市民運動だという。しかし、労働者と市民と農民という様な分け方というのはすでに過去のものになったのではないだろうか。何故ならば、権力支配は階層的な差別を通したあれこれのアメ玉を投げ与えて支配する余裕がなくなったことが60年代後半以降の帝国主義的な社会再編という内実ではないだろうか。いうならば新全総、このことが示しているのは、労働者市民の差別なく総体として管理収奪すること抜きには、そして総体として帝国主義政治構造の中に動員すること抜きにしては帝国主義としての政治が成立しないという局面に入ったということではないだろうか。それを知らないのは自称新左翼だけである。だからこそ市民運動、労働者運動、農民運動ということで表現し、あたかも労働組合の中へまいもどればプロレタリア運動ができるという幻想が始っていく。私は労働組合運動を否定するつもりはない。しかしプロレタリア本隊論などという言葉を通して今問いつめている斗いに限定的枠組を作ろうなどという発想は我々の側から捨てなければならない。今必要なことは、支配に対して権力斗争とは何かということを明らかにし、支配総体に対

は、党が革命をやり革命の権力は党の権力などと言うバカげた論理をもって大衆斗争をおさえ解体する危険をこの十余年間やってきたのだ。

問題は、この帰結が先ほどの島君の挨拶の中でも指摘されたし、会の中からも指摘された様に、浅間山荘での事件を現象型態的に批判し総括をすることでは、さしせまった階級斗争の性格を理解することにはならないし、ましてや斗いの方向性を提起する力量を持ちえていないことを自ら表現したものに他ならないといわなければならない。

革命的激動期において、権力を持っている階級が「私は非常に能力がなくなりましたのでぜひ能力のある方が権力をもって下さい」などという形で平和裡的に政権渡しが行なわれるなどという甘っちょろい考えをもっている革命的同志は一人もいないだろう。革命の過程では暴力斗争は不可避であり、革命が軍事の問題として語られることはまさに権力との対決が「軍事＝大衆的暴力斗争」として結びつけられる面ももっているからである。権力の主体である全人民がブルジョアジーを打倒するために持つであろう銃を組織として、言うならば全人民の武装として表現する、このことを私達は組織として形成することを語らなければならないのである。何故ならベトナムが銃を持たずして戦後27年の帝国主義の支配に抗しえたか、中近東のパレスチナゲリラ、帝国主義の石油資源をめぐる抑圧と侵略に対して銃を持たずして民族の解放を、革命という問題を斗い抜くだけの条件を持ちえているだろうか。中南東におけるス斗いも又しかりだ。暴力装置を日常的に発動してくる帝国主義者に対して「陳情と紙切れ一枚が権力になる」こういう発想はすでに歴史の遺物である。我々はかかる立場に立ってこの間世界における階級斗争の進展状況なり性格を、そして我々が担うべき70年代世界の政治の領域を大胆に語ってきた。今そのことを基軸にしながら、70年代とはいかなる時代に突入したのかを提起しよう。

一つは現在進行している権力弾圧に対してある諸君は反動だという。ある諸君は政治弾圧だという。たしかにそのどちらも正しい。しかし70年代国家総資本による人民の支配の現在的性格について、我々は「権力斗争の時代」として大衆反抗、大衆の暴力の自然発生的斗いを個別の領域からではなく、全社会的権力再編への反抗として把握し、そうであるが故に大衆的政治同盟の確設を提起してきた。

ブルジョアジーの政策というのは表現はどうあれ基軸は一ねに一つである。

保安処分は何らかの形で弾圧である。国民総背番号は何らかの別の次元から行われる弾圧である。こういうふうにいうことは誤りではない。しかしそれでは70年代の階級関係を認識していないのだ。本質は国家総資本による人民の管理、支配の総体の部分であるということだ。個別の企業での労使関係だけが階級斗争だといわれてきた時代は終ったのではないか、何故ならば個別資本の枠で、企業の枠で、階級斗争だといっている限りそれは賃金の引き上げと労働条件にとどまらざるを得ない。そこには階級支配総体が明らかにしている階級的政治はでてこない。これが60年以降労働者の団結体といわれてきた総評が真に労働者の結集体として斗い得ない基本的な要因ではないのか。

今一つ。最近公害、住民運動、こういう形でいわれる。今までだったらこれを第二戦線市民の運動といってきた。市民主義の運動が何故三里塚で真向から権力と対決せざるを得ないのか。水俣の人達はいかなる保障があろうとも保障を否定することこそ公害斗争だといい切ってきた。公害といい、基地斗争といい、その斗いの中には労働者は居住の中にいないのか。労働者の24時間の生活は生産点をこえたところで対決する斗いがあるんだということを示している。従って労働者諸君が、ぜひ問いつめてほしいのは、今や個別の企業における斗いは階級斗争ではなくして国家総資本による24時間の管理収奪支配に対して斗いを宣言することこそ階級斗争であるということである。

第二の問題についてふれてみたい。労働組合は革命の学校といわれてきた。私達はこのことを否定する必要はない。しかし、今進行している労働組合の戦線統一は日本帝国主義の権力的社会的再編の主要な一環であり、この戦線統一の指導部の言っている「資本とは生産においては協力し、分配においては対立する」ということは日本のブルジョアジーが東南アジアに侵略をし収奪し抑圧し支配するとしたら、それもまた生産力、利潤を高めるためであり、ブルジョアジーが"協力"を強請するということは歴史が明らかにしていることではないのか。我々はブルジョアジーと共に東南アジア人民の抑圧の尖兵たることを甘んじて引き受けなければならないのか。そうではない。それを拒否する斗いは微力ではあっても始められている。その為に我々が、労働組合を革命の学校という時には戦後27年だけを見ても、労働組合とはこういうものだということを根底的なところで疑かめ、労働組合という表現の中身を形成しなければならない。そうでない限り我々はブルジョアジーの尖兵に落入るだろう。個別利害の集約体としてのみの労働組合である限り、60年代を言葉で語ったとしても60年代を越えることはできない。我々は今、新たなものを形成する責任を引き受け、労働者は個別的企業戦場での日常的斗いにのみ自らを限定してはならない。この限界を突破し、階級的政治として権力との関係を直視し斗う段階に入った時代こそ現在なのである。

現在個別企業において進行している労使関係というのは、部分的にはどうあれ総体としては労使休戦である。労使休戦は社会再編の大きな柱であり、権力＝ブルジョアジーの政治動員機構として国家の包囲の枠の中で労働者の団結体という幻想がふりまかれ、労働者支配の機構が完成する局面に立ったが故に、

して反抗すること、その反抗の過程が階級形成として成立せしめることを我々の政治責任として引き受ける段階に入ったということである。それを理解することができない諸君達が、ある段階では機動隊をセン滅すれば革命は近いと思いこんだし、ある諸君達は労働組合のあるがままの民同に変って、権力ー総評執行部をとれば革命が近いと思ったし、ある階層はその運動がどうあっても我派がふえれば革命ができるという幻想にとらわれたのである。

70年代のこれからの政治局面というのは、我々があらゆる局面での斗いに責任をとり切り、斗う部分との結合ができないならば、多分、官僚と自民党と「革新」が住民の意志の代表という大儀名分を使った利権争いを日本の政治として人民支配を強めていくであろうことは明らかである。しかも人民はいまだ「革新」への幻想を断ち切っているわけではない。美濃部スマイルといわれたあのスマイルがこの間、いかに階級を愚弄し戯瞞しているか日々の斗いの中で明らかにした。

スマイルが泣き顔に変わる時、ブルジョアジーが危機に陥いることは1930年の状態をひもとくまでもなくこの私達が理解していることである。スマイルから泣き顔に入る時代に私達が直面したことを確認したいと思う。支配の両里が解体する時、従来の価値観、平和・民主・繁栄の戦後意識が解体する時、革命そのものを追求・希求するもの、現状維持を追求するもの、現状変革を最も反動的に追求するもの、言うならばこの三つの政治的、意識的な分解をもたらす、かかる階級関係の段階で、大衆斗争を自然発生的なままに放置するならば斗いのエネルギーは右にも組織される危険があるのだということを知っておかなければならない。

大衆的運動一般が革命運動だなどという発想で、いかに献身するかだけで取組むとしたらこれは日本共産党の方がずっとうまい。何故うまいかというと、必らずそこから得る物をちゃんと展望している。献身さだけではだめなのです。そして私達は多様性を持って始まる斗い自体が権力の支配の現状の中では、合法を通して現われてくるが故に、現われてくる斗いを、多様性を、全て権力斗争への道として斗いの方法を提起し行動する時、この事を私達は献身というふうにも言うことはやぶさかではないが、私は献身一般では政治的には越えられないと判断している。職場においてもしかりです。職場斗争を断固としてやれば革命になるのだということではなくして職場斗争が権力斗争として登りつく論理を明確に展望として提起した時に初めて職場斗争は一企業の枠を越えて、地域的に結合し、権力の基盤において組織戦を展開し、まさに権力をゆさぶる段階に入る事を私達は理解しておかねばならない。労働者は今、反動的労働戦線統一に屈服するか、幻想をもって提起されている60年民同といわれている民同路線に現状維持をたくすのか、それとも分裂少数派というレッテルを受けたとしても、あえてそのレッテルを実行し抜く、この階級の変型を地域住民の斗いと共に結合することを通して権力斗争としての形成に入っていくのか。この三つの、いわば権力をめぐる斗いの局面へと入った事を理解しておかなければならない。

我々に必要なのは、議会でもなければ、既成の組織の実態一般を握ることでもない。従来支配の回路として使われた諸組織の実態を我々が握ることで現状の階級関係が革命的に変化すると思うのは幻想である。我々に必要なのは、権力へと登りつめる自らの組織をつくることである。私はそのように問題を立てそのようにこの間語ってきた。そして本集会に結集した力を、協力を得て60年代後半の斗いを、限界を克服しながら担ってきた。そして明日にむけて我々はローテ15号で、斗いの戦線構築のために党派の狭い政治の枠を取り払って斗う人民の戦線結合に政治責任をとる事を諸党派に呼びかけ要求をした。おしいかな、くやしいかな、たぶん明日は各党派バラバラで集会が持たれる。このことは各党派の政治責任を大衆的に弾劾しなければならない局面だと思う。私達はあきらめもしないし放棄もしない。権力斗争に向けて正しいことは常に正しいと言い切り、斗うことを決意しておかねばならない。この段階で階級斗争がしんどいからといって、ここに結集した人も含めて、このメットを割るような事があったらその人は歴史から消えてほしい。そしてメットの色を変えれば運動ができるなどという幻想に立つ人も又戦線から離れてほしい。そして、メットはかぶっているけれども心臓の動きと手足の動きがメットの色にそぐわない人も又戦線を離れてほしい。そしてメットが一番偉いなどという思い上った人は、メットを脱いでほしい。我々は大衆が欲求する権力と斗う先斗部隊の一員であることに誇りを持ちたいと思う。このことを言い切るのが、言うならば、十数年間血みどろな斗いの中で自己の限界を突破し、その限界を突破する過程で、あらゆる斗いの責任を引き受け、あらゆる歴史に耐え抜こうとしている我々の責任ある集会として最後に確認しなければならない一点である。

そこで諸君！私は最後に次の様に全体で確認してほしいと思う。今、私達は最後の段階で最後の局面の斗いの段階に入ったことを確認しなければならない。それは、60年後半の政治敗北のひとつひとつが左翼の後退一般にとどまらずに、人民の抑圧の欲求にもかかっていることを私達が自らの責任として痛苦に確認させられているし、このことを最早繰り返してはならない。そして又繰り返せないということである。従って我々は今後の斗いにおいては戦術局面一般で前進、後退があり得たとしても、総括の段階で、政治敗北という表現を二度と使ってはならない段階に入ったということを確認しなければならない。もっと直截にいえば、権力獲得への予行演習の段階は終ったということである。今や支配をめぐっての階級階層の分解が始った。我々は、あらゆる局面の斗いは権力斗争としての内実をもち、萌芽をもち、そのことが組織され、従って権力斗争の時代に突入したことを確認し、であるが故に諸君達の責任がより一層重くなり、より一層、権力の弾圧が激しくなるだろうし、そしてより一層地域社会、市民社会の解体に対して、その解体を宣言し、責任をとらなければならないのは諸君であることを言っておこう。

全国のローテ訪者諸君！

6／14共産同政治集会は、荏原文化センターに於いて、日夜、諸戦線で斗い抜いている四百余名の学生、労働者、農民、インテリゲンチヤ諸君の結集の下、司会をつとめる一条同志の力強い開会宣言と共に開始され、会場を埋めた赤いヘルメットの戦士諸君の、更なる戦闘への新たな決意と熱気のみなぎる中、滝田光輝氏、宮岡政雄氏、島　成郎氏、そして、同志松本の発言を受け、反革命包囲網に対する、大衆的反撃の戦線　築と、ブントの再建に向けた固い意志一致を確認し、圧倒的にかちとられた。

以下は、6／14共産同政治集会に於ける名氏の発言の報告である。

60年ブントの歴史的意義

浅田光輝

6月15日を、私は非常に感慨深い思いをもって、毎年思い出します。60年安保闘争の中に生れた新しい左翼の運動が出発したのはこの6月15日であったと私は考えております。この出発は1人の女子学生の死によって贖われた。そして60年代の経済成長による安定期の大衆消費時代に戦闘的な運動を担ったのは、6・15と共に出発したこの新しい左翼の運動であったと思います。

6・15の新しい左翼の出発は何によって古い左翼と区別されるのか。端的にいえばそれは従来の左翼の運動が権力の制圧に対する受身の抵抗に終始したのにたいして、この抵抗から積極的に権力に立ち向う闘争を発足させた。これが私は新左翼の運動の最も著しい特徴であろうと思います。この運動がそもそも現実にふき上げたのは59年の11月28日、国会構内突入事件であったといえましょう。これはベトナム訪問が衆議院において強行採決されたことについて安保闘争で国会周辺に結集していた東京地評の労働者が中心になってひき起した行動でした。そしてそのあとに60年6月15日安保が自然承決の日を待つに至った最終段階において全学連の国会構内突入がある。この11月28日と6・15と、前者は労働者を中心とし後者は全学連を中心としているこの二つの事件によって、ニューレクトの本格的な出発が始まると私は考えております。

ところでこの事件から出発したニューレフトの運動、その中心であったブントの切りいた地平はいかなるものであったか。

これはいろいろとその性格その特徴をあげることができるでしょうが、私なりにそれをかいつまんで申しますならそれには3つの特徴があったと思います。まず従来の共産党の官僚主義的集権性を否定した。そして反権威主義の上に立って自由な自発的主体に立脚する運動を展開しようとした。この点が第一であります。自由な自発的主体があまりに自発的でありすぎてブントは今や3つも4つもに分かれております。第二点、従来の民族主義的な一国革命論に対し世界革命の思想を提起した。これはマルクス主義革命思想の復権といえましょう。第三には平和共存，機会主義，祖合主義に対する戦闘的な革命闘争の地平を切り開いた。以上3つです。

しかしながら先駆的運動はどのような運動にも必ず未完成の弱点が伴います。ブントはそういう弱点を同時に合わせ持っていたことを改めて考える必要があろうかと思います。その弱点と申しますのは私たりに言うならばこれが学生運動に出発した社会運動革命闘争であったという点から観念性、抽象性が著しい。従って戦術の違いということでさまざまな対立が生じ、そしてまことに残念な内ゲバというような現象も生じております。更に同じことでありますけれどもこの運動は労働者運動をいまだ抱摂し得なかったという弱さを持っている。

60年代半ばに日韓条約反対闘争があり、そして60年代末には世界資本主義体制の矛盾が露呈し始めております。そういう中で私はこのような運動の弱さを積極的に克服しうる客観的条件が新たに我々の前に展開されつつあるのではないかと考えます。ブントがあるいは戦闘的な左翼の運動が労働者運動をついに抱摂し得ず学生運動に出発し学生運動の体質を脱却し得なかったということは60年代を通じて経済成長が超高度成長が進められその中で大衆が大衆消費状況中におぼれている。そういう大衆状況が客観的条件としてあったと思います。しかしながら今やそういう大衆的な条件が変わりつつあるのです。それが60年代末以来いわゆる70年代の特徴であろうと思われます。そういう中で戦闘的左翼の運動は新たな出発を決意しなければならない。そして先駆者としてのブントの戦闘性を広範な大衆的労働運動において展開しなければならない。そういう責任がブントの諸君の肩ににかかっているのではないか，特に諸君が共産主義者同盟再建準備委員会を称しているならばこれを本当の再建準備委員会にしていただきたい。そして本当の再建をいま、今日から直ちに努力していただきたい。

砂川からの闘争報告

宮岡政雄

ただいま、御招介いただきました砂川の宮岡でございます。非常にさしせまった情況の中で72年の6月14日を迎えた。ここで私は今における6・15の意義というものをみなさんに私なりに訴えて、みなさんの奮気を訴えたいと考えます。浅田先生からも、みなさんの今後の行動というものに対して、大きな期待がよせられているのと同じように、私もみなさんが、今日、60年安保斗争をとらえかえす事に大きな期待をかけているわけであります。

しかしながら、体制側がすでに、先どりした攻撃をかけてきており、我々、人民の戦線がこれに大きく後退している現実を私はここでみなさんとはっきり、確認したいと考えています。御承知のように、死をもって樺さんが訴えた60年安保の日から本日はちょうど13回忌にあたります。その13回忌にあたる年に、私たちは、5月15日の沖縄の施政権の返還を迎え、6・15を迎えています。いうまでもなく、沖縄の施政権返還に対して、全ての人々が、からくり返還である。偽瞞的な返還であると指摘しており、私もまさにその通りだと思います。我々は、日米安保体制というものに対して、60年安保斗争を、70年斗争を闘ってきました。しかしながら、70年代の日米安保体制というものがまさに自動延長という形で継続され、この自動延長というもののなかで、御承知のように、沖縄の施政権の返還が行なわれた。沖縄の斗いというのは、施政権の返還というものの中で、再び安保体制の中に組みこまれた。しかも70年代は、私に言わせれば、自動延長の中で、日米体制はその性格を変え、もうすでに、80年代に向けて安保改定阻止という斗いを斗う事は出来ない情況を迎えているのではなかろうかと思います。この点において、私たちが現在戦略として目標にしている日米体制というのに再度挑戦しなければならない契機が表われています。

先日、私は請君たちの指導者である松本さんを通じて今、全国的な、大集会を、大デモンストレーションをまきおこす大きな意義があるのではなかろうかとお願いをしたわけです。同時に、明石反戦の諸君がわざわざ私のところに訪れて6月の段階で全国的な大きな盛り上がりを作ってくれと、そして三里塚の戸村さんと宮岡とが訴えて、なんとか結集してほしいという切なる願いがわざわざ私と戸村さんの宅を訪れて行なわれている。これは単なる1人の人であるが、各地からこの体制に対してなんらかの形で斗いうる大きな潮流を作ってほしいと呼びかけられたわけですが、残念ながら諸君と共に新左翼と名のる人たちが今日の時点でどうしても結集する事が出来なかった事は私は非常に残念だったと思います。

沖縄の返還を通して沖縄斗争を契機に再び安保体制というものに目を向けていただきたい。そして、この斗いというものを、70年代を通して、斗っていかなければならない。この斗いの原点はまさに私は反基地と反軍にあると思います。今、現在、私が問題をみなさんに提起してはたいへん失礼でございますが、立川の基地は御承知のように69年から米軍が解散している。いったい今、何が残されているか、支援機能が残されているという事がはっきり、つい数日前の江崎防衛長官からの発言があった。実は私たちは6月20日の公判の中でその事をつかんだわけですが、一体支援機能とは何なのか。まさに日本の再軍備はアメリカの支援機能である。この体制に対して斗いうるのはまさに反基地と反軍である。こう私はみなさんに問い返したわけです。そういう中で私たちは再び70年代の斗いというものを安保条約に向けて斗いのほこ先を再びとらえかえす。こうした時に私は6・15の樺さんの追悼というものが大きく意義があると思います。その事の今日的意義をここに感じたい。みなさんが今後再び、安保粉砕に立ち上がってゆく、アメリカ帝国主義と結託する日本帝国主義を粉砕する原点を今日から作り出していただきたい。実は私のほうとしては、その原点として3月の19日に提起した全国の軍事基地に土地を貸している地主さんたちに呼びかけて、土地の再契約拒否、そして、絶対、日本の土地を、戦争の為に使わせないという斗いを呼びかけた。幸い本年は6月27日を以って、20年の契約期限が切れるこれを訴えると同時に、私たちは沖縄の公用地法を粉砕して立ちあがるというものを原点に基地闘争を行い安保体制というものに対決をしようとこう考えているわけです。どうかみなさんが、みなさんの行動から見ればたいへん体制内の斗いであるという御指摘があろうし、あるいは、極端に言えば反革命的な斗いであると言われるかも知れない。しかしながら、大衆の要求、地域住民の要求をたずさえて斗うところに大きな革命への前進があるという事を私は18年の斗いの中ではっきりと経験をした。即ち安保体制の一角というものである行政協定からなる土地等に関する特別措置法という法律を粉砕して私たちは厳然として立川基地の拡張を阻止して来た。一体この日本列島のどこにかこの一角があるか、こういった時に私は、声を大にして、私の行動を大に宣伝したい。みなさんが大きなエネルギーを結集して、血みどろのりっぱな斗いをした三里塚の斗いは残念ながら体制内の斗いに勝利する事は出来なかった。我々は斗いの中では敗北しても体制内の斗いに前進している。ですからみなさんから日和見であるとか、あるいは斗争ではないとかという評価がだされても私はこの評価を快く受けたい。しかしながら私たちの斗いというのは前進している。こうみなさんに訴えたい。その証拠には6月の11日に社共が総評をまじえて5千人の集会をうった。選挙前の集会に終っている。11日の立川基地に対する反対の集集会というものはまさに今後の国会の解散を予想する選挙の運動にすぎなかったという事は、今日になって社会新聞の記者の諸君が宮岡民法第694条の問題というのはどうなんだ、と聞いてきた。彼らは決議して、行動を提起したが故にまだその本質がつかみきれていないというのが現実である。私たちはそうではない。すでに3月19日にこの問題を提起し8月の18日には敢然と東京地裁の民事30部で刃を交して694条と対決し、日本の軍事基地というものを根底から粉砕する斗いをくもうとしている。叛旗の諸君が砂川の反対同盟にはすでに斗う視点をもたない。斗う原点がないとこういって鉄塔を立てたのに、あ鉄塔を支えているのは何なのか。そして斗いの核心にふれて斗いうるものは何か。私達は基地撤去の原点である農民の土地の奪還その斗いを提起しているわけであり、決して、私たちはみなさんのようなりっぱな斗いは出来ないかもしれませんがわたしたちには私たちなりの斗いがあるという事をみなさんで充分御理解いただいて、我々の斗いというものを見つめていただきます事を切にお願いをして一つの問題の提起として本日の集会の御挨拶に変えさせていただきたいと思います。

新左翼運動の危機と安保ブントの意味

島　成郎

みなさん、こんばんわ

非常に祭り上がっている政治集会に、私の挨拶は水をぶっかけることになるかも知れません。

実は、私、こういう集会で政治的な発言をするのは12年ぶりでございます。そのきっかけとなったのは、ごく簡単な事で、ここにいらっしゃる何人かの昔から知っている友人がやってきまして、何か話さんかという事なので、「おまえは、どのような派であるか。」と聞きましたところ、「日本の新左翼の中で一番小さいセクトである。」という事なので「それではよろしい」とひきうけたわけでございます。ただそれだけではございません。この12年間、私はみなさんと違いまして、或いは同じように、一人の生活者として私なりに生きてきました。

後半七年間は、"気狂い"とか"馬鹿"とか"無法者"とかいわれている人達を相手にして働いてきました。精神科医師という名前がつけられています。このような、社会からはじき出されただけでなく、鉄格子の中に閉じこめられた人々を相手にした生活をしていまして、ちっぽけな、忘れさられた場所ですが……私なりに、日本の現実の矛盾を見、又体験してきております。すでにここでもいわれましたように、国家権力による人民に対する攻撃は新しい段階に入ったように思われますが、私の周辺においてもこのことにぶつかります。即ち、精神障害者などに対して向けられている"保安処分"がその具体的現れです。詳しい事は省きますが、簡単にいえば、"邪魔物は消せ"ということなのです。御存知のように、ヒットラー・ナチスは、精神科の医者をも動員して、数十万の精神病者を殺し、後に数百万のユダヤ人等の大量虐殺への道をひらいたのですが、現在日本に於いて、行われている精神病者への対策は、本質的にこの思想と同じものです。例えば、革新といわれている美濃部都政の精神衛生の一つに現在山谷対策というのがあり、問題になっています。社会からはじきだされた山谷の労働者が、働く場所がなく、明日への希望ももてず、腹が立ちながら、酒を飲み、鬱憤をはらしていると、その労働者が送られる先は、一つは刑務であり、そして一つは精神病院であります。"都民の平和と安全のために""多数の平和で幸福のために"のスローガンの下に、最先に精神障害者が血祭りにあげられるのです。決してこれは、うらぶれた場所においやられたもののひがみ言ではありません。いってみれば、現代資本制社会の冷酷な論理であり、様々な立派な言葉でかざられた"近代合理主義"の原理であり、"民主主義"の正体でもあります。ロシヤなどの疑似マルクス主義もこの例外ではありません。……このようなとにも、現在の日本社会の矛盾と権力の動向を見ざるをえません。そして非常に腹を立てています。しかしそれと同じように、このような地点にいても、このような日本の権力と社会の原理に対する本質的な抵抗をも経験してきております。

それは所謂派手な政治的斗争ではありません。が、日本社会の本質をえぐるものの一つにも思えます。即ち上記のような権力の攻撃に対して、私はここにくる前まで大阪にいて参加していたのですが精神科医の集りである日本精神神経学会で、数年来激しい斗いが行われ、保安処分に反対し、山谷対策への反対がされるに至っております。しかもこの斗いは、先にのべた国家権力の攻撃を可能にしたのは、内部の精神科医を傷痍する大学教授への告発と追求なしにはあり得なかったこと、そして又、今まで完全に口を開けなかった、大人しい精神病者やその家族達が始めて立上ったことという事実によって特筆すべきものと思います。手前味噌で恐縮ですが、もう一つの例だけあげましょう。先程司会者の方もいわれましたけれども、そして皆さんも体験されたと思いますが、60年安保斗争以後、私が心を動かしていた、いや動かざるを得なかった斗いに、大学斗争があります。69年1月18・19の安田時計台の攻防戦が行われて以来三年半たった今、大学は全国で静かなように見えます。しかし、この静かになった東大のキャンパスの一角の建物、通称赤レンガといわれている建物だけは、3年半を経過した今日でも、厳然として、東大精神科医師連合…私もこの一員ですが…この組織の自主管理の下にある。ここでは勿論、立派な医療が行われている。ずっとそうですがこれを壊そうと権力や、日本共産党の諸君によって度々試みられてきたがこれは全部失敗した。所が最近になって様々な卑劣な企みが露骨になってきたのに対して、医師、看護婦らだけでなく、患者さんが立上った。"私達は自ら選択したこの自主管理病棟での治療を望む"とごく当り前の、しかしギリギリの要求で立ち圧殺しようとする人々につきつけた。昨夜おそくまでやっていた先の学会理事会で激論の上、この患者の要望を確認これを権力によって圧殺することに反対するとと決議を可決した訳です。

二三の例をあげましたが、このようなことは、まあ今日の話には、直接かかわりのないことですが、最近の情勢について、私は、私なりに非常に怒っているわけであります。怒りというのは人間の感情の中で一番大切なものです。何故怒っているかというと　まあおこりんぼの方ですからよく怒りましたが最近は、我慢強くなって少くなりましたが…

今は非常に、心の底から怒っている。

先にあげましたような国家権力の動きに怒っている　私の家に何の法的容疑もないのに刑事ががきたり電話が盗聴されたりするような事態や、長髪のものが下宿を探しにきたら警察に通報するようにと不動産屋を脅したりするようなことも怒っている。……この内容は司会者もいわれた内容と本質的なことでは共通すると思います。この面からいえば、一つの危機といえるかもしれません。この危機の政治的な意味は後で松本さんが、詳細に展開されることと思いますので省略します。

しかし私が心から怒っており、その限りで現在の日本の危機であるというのは、たゞこのような権力の攻撃、反革命の包囲という事態だけではありません。最大の危機と感ずるのは、この十数年間の中であらわれた戦斗的な左翼というものが、現在の事態に直面し対応している仕方の中にあるのです。この対応は、極めて深刻な形で進行しております。

今年の初め以来、連合赤軍の浅間山荘銃撃戦、粛清、リンチ殺人、あるいは、アラブの銃撃戦などが矢継ぎ早やにおこり、これを機に、権力とマスコミの"過激派"への総攻撃がおこり、文化人どもが、又々これに伴唱しただけでなく、左翼政治派が右往左往しております。この姿というか、この反応—この情況に私が、最も腹を立てており、そのために、話をしないかといわれて馴れないことを引きうけた理由があります。

ここに来ておられる諸君にききたい。

どんな政治的な威勢のよい言葉を語らうとももし諸君が現在、すっきりした、もっと激しい言葉でいうなら"これなら私は命を賭けられる"というような思想と、理論と斗争目標をもっていると断言できるだろうか決してそうではないだろう。断言したら嘘になるだろうと思います。しかし又、おそらく諸君の一人一人が、この問題に心から対応せざるをえない…答えられないけれど、避けるわけにはいかない、どうにか応えなくてはならない…ここを突破しなくては進めない…そこで格斗していられないという状況ではないかと思う。この点について、即ち、連合赤軍事件の様々な対応の仕方に私なりに非常に腹が立っているのです。

権力やマスコミと相和し合奏している共産党や黒田さんの所にも腹が立ちますが、今はそれは捨ておいて、ここでは所謂新左翼諸派や進歩的知識人の対応に限定しましょう。

既に司会者の方もいわれましたが、この事件は、"銃撃戦は立派だったが、リンチ殺人はゆるせない"とか、"大衆に学ぶ態度が少かった"とか"革命軍隊の規律が欠けていたと"が唯銃主義で小ブル急進主義だった"とか所謂幹部の自己批判が行われているけど、或いはさまざまな論評が行われているけど、冗談じゃない。そんな次元で片付けられることじゃない。決してそんなことで済む問題じゃない。60年安保斗争前に私たちの創ったブントの意味について、先程浅田さんがいくつかいわれたが、新しい戦後左翼運動の地平を伐り拓いたと私が理解しているブントの意味の一つは、暴力革命ということだったと思います。即ち高度に発達した資本制社会でも、根底的革命は平和な手段、議会による漸時的進出とか、労働者のカンパニヤ・ストライキなどによる手段によっては、決して、行うことは出来ないということです。確かに、60年以後、我々が拓いた地点より色々な意味で進んだ斗いが行われてきたと思います。同時に権力との斗いも、行為も深刻にならざるをえない。これに対抗することからゲバルトという言葉も生れたし、棒きれから更に火焔瓶が、次には銃が、手製爆弾が、という手段が生れたのでしょう。これは論理上からも行動上から一つの帰結なのであって、国家の暴力的顛覆（ゲバルトザーム・ウムシュルトルツ）ということからいえばそのこと自体は、極くささやかな抵抗の形であって、ラディカルなことでも過激なことでもない。ここになにか特殊な意味づけして軍事軍事と騒ぎたて尻馬にのったかと思うと、他方旗色が悪くなると唯銃主義だったとか大衆的運動との結合を忘れたとか、人民という面を忘れたとかいって、こっそりと、衣替えするデマゴーグ達の変節を決して許してはならないものと思います。更に政治、斗争は厳しいものです。思想の斗いは更にきびしいものかも知れません。我々が少くとも政治的斗いを目指して、国家権力の顛覆と権力の獲得、社会の根抵的変革の立場で運動をするという立場に立つならば、政治的徒党を組まなければならない。しかしこれが大変困難なことで、現在の社会に於て、個人の思想が政治組織において統一するということは、全くあり得ない。原理的にもあり得ないし、現実的にもあり得ない。まして生活の統一などはあり得ないことなのです。しかしそのにもかかわらずある理念の下に徒党を組まねばありえない。何に向って組むかというと色々な場合があるでしょうが、少くとも明らかに敵の心臓を突き通すような斗いに向って組む。当然、敵と斗う。その目標の実現の為に、敵を倒さねばならぬ。倒さねば味方そのものが倒されるとの原理的問題を棄てねばならぬという事態に直面することは当然であり、この時裏切者がでて、組織が転目になり、脱落者の為に敵と斗えなくなるならばこれを処分するということも、ありえるということはこれ又政治の冷酷な論理なのです。

連合赤軍の諸君が12名の"同志"を殺したのも、決して、精神医学上の異常でもなければ、ましてや同志愛がなかったと、プロレタリヤ論理が欠けていたとか、道徳的に頽廃していたとか、小ブル個人主義だったとかそんなものによるものでは決してないのだ。こんなことで自己批判したり、他人事のように論評されたりしたのでは、それこそ死んだ12人の諸君は浮かばれない。そんなことで自己批判するものに、私は全く腹の底から怒りを覚えます。だいたいですね、私は自己批判なんていうのは軽々しくするものじゃないんだ。やってやってやり抜いて…その結果どうなるか、自分だけじゃなく、他人も殺してしまうかも知れない。その斗いが、ある政治的目標をきりひらくことにあるかも知れない。…の斗いに。思想の問題を提起する或る意味をもつかも知れない。しかし資本制社会が完全に否定される迄、斗いは概ね敗北する。…或いは殆んど意味のない敗け方をする場合だってある。……失敗だということもある。…その敗北を自分で認めたら、認めざるをえなかったら、そうした時は、ひとり黙ってその敗北の意味を噛みしめていたらよい。子供じゃあるまいし駄けた自分の行動に、自己批判とやらの泣き言なんて、滅多にいうもんじゃありませんよ。このような顚末は赤軍幹部だけに見られるものじゃない。むしろ、最も斗った赤軍だからこそシンボリックに露わになったのだと思います。

この事件を機にして、あらわになってきているのを見ると、決して今に始まったものじゃない。ここ一・二年の情況を見ていますと、権力のやり方と対応しておるものですが、いわゆる変革を志向する側に、丁度戦前のある時期に類似している。全面的な思想的頽廃、後退、転向が進んでいるように、私は思わざるをえません。雪崩をうつているといってもさしつかえない……これこそが危機です。その転向のあらわれは、いろんな形で進んでいます。最近、どこかで笑い話のように聞いたのですが、ある集団がヘルメットを集めて叩きわって燃やし、"もう、ヤーメタ"という儀式をしたそうですが、こういうのは無邪気なもので、大した害はない。私がいうのは、こういうのではなくて、もっともらしい仮面をかぶった、美辞麗句を並べ、革命的とか人民とか、なんとか勇しい言葉や行動の中に進んでいる転向であります。この点でいくつかの点を指摘しましょう。69年のブントとその斗いに意義があったとするならば、その第二の点は、反スターリン主義、スターリン主義に対する対決を、原則的に行いそれを運動の原理に据えたことにあったと思います。反スタという言葉は、その後流行語になりましたが、その内容は政治的にいえば、一国社会主義論と、"社会主義国"の外交政策を主とする戦略論に対する、世界革命論、民主的革命を前景にし、民族主義を基調とする二段階革命論に対するプロレタリヤ革命論であります。流行語になった反スタについて、この二つの極めて明確な思想的原理を忘れた転向が嵐のようにおこっていることについて、諸君の注意を換起しておきたいと考えます。

この明確な、原理からいって現代政治におけるスターリン主義とは、一方におけるフルシチョフ主義であり、他方においては毛沢東主義であることも、明々白々な事実であります。ところが、暴力論から即目的にうつったのか、戦術的な点で便宜的に感激したのか、或いは、"文化大革命"なるコケオドシに満着されたのか、或いは昔かわらぬアジヤ主義に回帰したのか、よくわかりませんが、赤軍の諸君を始めとして、左翼セクトの諸氏が今頃になって、毛沢東主義万才などといって、このスターリン主義にすがりついている様は、全く、驚くべきものであります。おそらく70年代の国際政治の動向を見ても、中国を一つの軸として回転していくことは明らかでありますが、日本においても、この毛沢東中国に対する思想的政治的態度において、自民党から新左翼に至るまで、転向が行われ、雪崩をうっていくのを見ると、今再び反スターリン主義の原則的態度を鮮明にすることは極めて大切なことだと思います。ロシヤが既にスターリン官僚の下、革命的エネルギーを失った今日、中国はなお相対的に人民の力、革命的エネルギーを保有していることは事実でしょう。しかしいやそれだからこそ、思想としての毛沢東主義が革命の清党派に幻想を与えながら、確実にスターリン主義として一国革命の中に諸国の人民のエネルギーを封殺し、中国という民族国家の外交的利益のために、革命の利益を圧殺していく戦術に移行していくことを見抜く人こそが、今こそ必要だと思います。思えば、連合赤軍の思想的惰落は、この問題を抜きにして、組織を合体したということに端的に現われていたと思います。ましてや、権力による敗北の中に、泣き言をいいながら、毛沢東万才を唱えて、スターリン主義にスガリついていっている現状をこそ、私は最もいやらしい、最も惰落した思想的転向とよびたいと思います。

思論反スタについての転向は毛沢東主義にのみあらわれているのではありません。

これが50年代のブントの特質であったと考えておりますが、ブントがスターリン主義について鮮明にし、その斗いを真向から行ったのは、当時、ハード・スターリニズムに対するソフト・スターニズムとしてうり出したフルシチョフ主義に対してでありました。構造改革派とか、トリアッチ主義とか、色々なスマートな、物新しい流行語をつかって踊りでたこの似而非紳士たちに対して、私たちは最も精力を費い斗い安保斗争の中でうちのめしたのです。ところがこのソフト・スターリン主義の亡霊が、思想的に破産するや、一寸ばかり過激な言葉を　して、"新左翼"と称して、うかれでて来たようですが、この政治的党派はさておき、構造改革派の、フルシチョフ主義、今なお生きのびているばかりでなく、先程のべたような、なだれ現象の中で、再び新な衣裳を着て復活し、転向路線の二つの目のより所になっていることを、指摘しておきましょう。くわしくは、のべる時間がありませんが、例えば、革命的市民主義とか、赤色地域主義とか、革命的組合主義とか、手をかえ、品をかえた形でこの極の現代改良主義が既にあらわれてきているのを見ると、歴史は繰返すのかという錯覚におそわれる感がします。（「革マルはどうだ」との声あり）ー黒田さんのところは、私は最初から勝いで、もともと政治をする組織だとは思っておりませんし、その後もそうだし、これからもそうだろうと思っております　から、これについては特にここでは言いませんが、反スターリン主義とか新左翼とかの看板を掲げた諸党派インチキ知識人の間に、以上のべたような傾向が一せいに始まり、権力の懐柄に相和し一体となってなだれをうつように思想的転向の時代が始まったのではないかというのが、私の感ずる危機であります。もう時間がありませんので、問題をなげかけるだけで終るわけですけれども、最後に一言だけいっておきましょう。

それは、みなたがたが、私たちが、政治を追求し、権力との斗争という限り、そして言葉と同時に行動する限り、自分自身が決心するとしないのにかかわらず、死に直面することであります。十二年前の明日、あの斗いで死んでいった樺さんのことを、私は今でも考えております。このような政治集会で、樺さんをダシにつかって政治的気勢をあげたり、自分の立場を語ろうという　ような気には、この十数年間、私は全くならなかった。樺さんを、英雄視する気は現在でも全くありません。

彼女は、私たちが1958年ブントを創った当初から、狭い事務所の中で一緒に活動した友人の一人でした。日常生活について顔を赤らめながら相談をもちかけられたこともあります。そのような友人として今彼の死について考えます。おそらく、あの日、死を賭ける決意などなくて、しかも最後まで斗おうとし斗った私たちと同じような一人として突然死んでいったのだろうと思います。

その後、十数年、より激しい権力との斗いが行われ、又は行われずに、多くの人たちが死んでいきました。私の親しい友人の死にも出くわしてきました。そして考えることは、死というものは、自らの意志じゃなくても、決して勇しい言葉をいわなくても、権力との斗いが激しくなければなる程、誰でも突然否応なく訪れるものなのだ、納得できないまゝ、死ななきゃならない事態に必ず行くものだということを知りました。

あなたがたが、政治に入る限り、そして、あなたがたが、その政治理念の下で大衆的斗いを行い、権力との斗いを行う限り、あなたがたの組織にいようがいまいが、或いは全く死など考えもしない人々にも、政治的死は訪れるものなのだということを知って、今後の斗いを行っていただきたいと思います。

御健斗を祈ります。

（註。この稿は6月14日の集会での挨拶の速記録を編集部の求めによって私が文章を整理し一部表現をあらため、一部冗長な繰返しを削除し、極く一部分補ったものです大筋は速記録によっておりますが、文の責任は、島にあります。）

70年代権力闘争を闘い抜く
革命潮流の形成へ

共産同（再建準）書記局

全国の革命的同志諸君、あらゆる領域において、支配権力に対する抵抗と攻撃を組織する先進的同志諸君!!

わが同盟は、4・5・6月闘争を経過する中で、いまや日本階級闘争の最前衛の位置を獲得しつつあることを確認しなければならない。それは、ある意味では主観の領域を越えて、客観的にもそうした位置をわが同盟が担わざるを得なくなってきているといいかえてもよい。

ここ一、二年の階級情勢は革命主体にとって、決して楽観すべき事態ではない。学園、三里塚、沖縄等における大衆的反権力斗争＝大衆的暴力斗争が、個別に権力による暴力的圧殺一市民的秩序の枠におしとどめられてくる中で、これらの斗いの中で多少なりとも突出した位置を保持していた左翼戦線諸党派は、そうした位置を党派的に維持していたが故に、混乱と内部分解に直面している。かつてのように、ここで左翼戦線の再編が開始されるという生やさしい状況ではなくなっているところに事態の深刻さがあるといってよい。そもそも、思想的・理論的立脚点が問われているからである。

新左翼諸党派、なかんずくブント諸派は、60年代後半に噴出した学園および街頭における大衆的暴力斗争を、旧来からの政治勢力構造の延長線上において、かつまた権力の暴力装置に対する自然発生的闘争としてしか見抜けなかった。これは当然にも、状況に対するプラグマチックな対応と党派論理の一人歩きとなる。彼らは自らを軍隊化させる根性もないかわりに、大衆に対しては「軍に入るか否か」という馬鹿げたつきつけを行い、広範な大衆の政治参加への意欲に対し、事実上の軍事抑圧をもって応え、革命的暴力の値を徹底的に堕落させておきながら、軍事のエスカレートを叫ぶことで党派延命をはかり続けてきたのであった。赤軍に触発され、蜂起や武装を呼号し、軍事をもてあそんだこれらの左翼日和見主義者、軍事空論主義者どもは、連合赤軍自身が胎んでいた政治的頽廃を、連合赤軍の壊滅以後、一挙に表面化せざるを得なかったのは当然である。

こうした事態に彼らを追い込んだのは、確かに権力のフレーム・アップによるところもある。しかし、それは今日の階級関係が権力による戦後支配秩序の再編にあって、かってない流動的性格をもち、その再編が大衆の存在、生活様式自体の転換を迫るものとなっているところに、大衆の暴力叛乱の前提的条件が醸成され、これを政治的意識的な形で、権力闘争の戦略的構造の中に位置付けていくところの強力な政治指導が求められている以上、左翼日和見主義者、軍事空論主義者が階級闘争の戦線から脱落し、広範な形で政治的頽廃状況を生み出してきているというべきであろう。軍事を叫んで軍事を行使しない、敵を殺すといって殺さない、首都ゲリラ戦といって記者会見をする、××党派に対する統一戦線（野合）と内ゲバ、赤軍派党の精算主義的自己批判、等々彼らの頽廃ぶりは大安売りだ!!

すでに過去の遺物として歴史的に証明されきたはずである。にもかかわらず、党派論理を接木しただけで盲目的に大衆暴力闘争への対応しかできないという惨な状況を始きもせずつくりだしてきた。赤軍の論理や三里塚における中核の対応（反軍基地闘争論）は大衆動から内乱論へ、戦旗等の党一軍路線となって現出した。つまりは大衆闘争に対する党派請負主義、代行主義となって現出されてきたのである。

70年代権力闘争にあっては、彼らが口先だけの左翼、左翼日和見主義以外の何者でもないことは明白であろう。

したがって、わが同盟は第一次ブントの革命性を堅持し、ブント内党派闘争の時点から階級闘争の質と有様について、その構造的変化に対応して、全く新たな視点からの問題提起を行ない、旧来の政治・経済闘争からの組織的転換を闘い抜いてきた。

まずは、権力関係から規定されるとはいえ、党と大衆政治同盟の設定である。高度な近代化及び情報網を前提とする人民管理機構の帝国主義国家にあって、また農村共同体的階級社会集団が独自に閉鎖的姿でもって存在し、それが階級闘争にあって恒久的陣地として機能するようなことのないところにおいては、まず、階級指導部を公然化させつつ、権力闘争を大衆的領域で指導するのは至極に等しい。さらに卒業が大衆自身の歴史的事業である限り、共産主義者は革命の専門技術者以上の者ではない。しかも、党派が大衆の日常性と隔絶したなかで、非日常的営みをもって、市民社会内部に独自の政治的社会集団を形成した場合に階級闘争の局面展開のなかで必然的に起る、党派の寡隊化、ないしは極端な大衆化を覚悟しなければならない。それ故、大衆的暴力闘争をそれ自体において、権力闘争への必然性へと導き抜いていくところの指導性の貫徹及び闘争主体の共同性の獲得において、大衆に対し開かれた同盟として大衆政治同盟を措定し、また一方において、権力闘争の過程における、権力奪取に向けた具体的、技術的な側面を戦略的視点からサポートする革命的工作者（集団）としての党を前提とした組織構図を確立した。

さらに我々は、60年代政治の範ちゅうにおける階級闘争が本来の意味での権力闘争としての性格を失い、労働組合運動（労働運動）イコール階級闘争という構図、つまり、旧来の団結形体に基づく組織及び闘争がブルジョア的次元での取引きの枠を突破しえないものとして、権力支配形体に付合し、また大衆の政治参加を、こうした組織的形態のなかに押しとどめ、事実上圧殺しているという構造を大衆的規模で突破するところの闘争陣型の構築をめざしてきた。これはブント内論争が権力再編の実態把握をめぐって、いわば権力闘争の内実をめぐるものとしてあったことに対するわれわれの論理的訣別であった。すなわち、共通認識としての社会的階級、階層分解を見抜きつつも、一方において、観念的に権力関係としてそれを左右への二極分解と理解し、敵権力及び右翼の部分に対する武装部隊の対峙を媒介にした左派形成論が登場する。結局、これは大衆の自然発生性を一方的に期待するところとなる。また一方において、権力再編を行政権力の肥大化及び軍事力の増強という形で認識したため、ストレートにこれに対して、味方の物質力の強化と闘争形態においてしか理解されないことになった。今日のブント諸派の権力闘争論の内実は、かかる理解を出発としているにすぎず、××ファシズム論はその理論的粉飾にすぎない。

ところで、われわれは、権力闘争の内実を全共闘、そして反戦が到達した質とその運動構造を再び今日の階級闘争の局面において、自己切開し、突破するなかで確立していかなければならない。この作業は決して新左翼的発想においてはなしえないのはすでに明らかである。6・14集会はまさにこの点を確認し

逆にいえば、権力再編はいまや、こうした左翼日和見主義、軍事空論主義路線を十分に利用しつつ、市民社会内部に反革命包囲網を形成する段階にまで、政治的地歩を固めつつあるといえる。このことは同時に、旧来からの新左翼運動の領域における大衆運動の基盤を荒廃させたばかりか、新左翼に対して大衆が良かれ悪しかれいだいていた大衆的戦闘性という評価を裏切り、猛烈な速度での権力の思想的再編をもたらすことにさえなった。

わが同盟は、こうした事態を直視し、あらゆる社会領域における大衆的闘いを通して自らの政治領域を拡大し、階級問題としての一大飛躍をとげなければならないという重大な道にさしかかっている。革命主体にとって事態は深刻であっても、一方では、沖縄・三里塚における闘争の後退局面の中から、闘いの永続性と自らを権力主体として獲得しようとする新たな闘争主体の形成が進んでいるように、職場生産点、住区、地域を問わず、権力再編に対する大衆的闘いの萌芽はいたるところに存在し、その前途は大衆自身によって力強く切り開かれようとしている。

わが同盟は、結論から言えばこうした権力再編過程において必然的に生起する個別矛盾の顕在化を通しての、大衆的暴力部隊の自律的形成を媒介にした政治的叛乱を地域において創り出し、その道環構造を同盟の戦略構造の中に定着させていくものとして、自らの任務を規定していかなければならない。

全国の革命的同志諸君、6月14日の政治集会は、まさにかかるわが同盟の客観的位置を鮮明にし、かつ階級的任務を一定程度明らかにしたといえるだろう。だが同時に、6・14政治集会、6・15統一行動の連続闘争を媒介にして、同盟が7月以降の大衆的暴力闘争を全国的展望をもって、及び全左翼戦線を領導し、主体的に形成していくという政治的牽引力を未だに有していない事実も、客観情勢の成熟度及び主体的組織力量（方針）の大胆な分析から総括されなければならない。

しかし、6・14集会はあらゆる戦線から四百余名が結集し、70年代権力闘争に向けた新たな革命潮流を形成しなければならないという強固な意志確認をかちとるものとして闘いとられたことは強調されなければならない。

6・14 政治集会が闘いとった地平

われわれは、"連合赤軍事件"の総括において、新左翼運動の歴史的終焉を宣言した。にもかかわらず、わが同盟は第一次ブントが日共内の闘争からブント結成そして60年安保闘争を闘い抜いたところの革命性を継承するものとして今日存在していることも明らかにしてきた。つまり、一国（段階）革命に対する世界（永続）革命論、議会主義に対する革命的暴力主義（戦闘性）、党派の純粋培養に対する大衆闘争論、労働者至上主義に対する階級形成論としてあったブントの革命的政治発想を今日の階級闘争の構造において断固として受け継ぎ、発展させるという立場を明らかにしてきたのである。

新左翼運動は、全共斗そして反戦労働運動（＝大衆暴力闘争）という形で表現されてきた大衆の政治参加様式を生起させ、戦後はじめての支配秩序の解体に向けた大衆的叛乱を自国帝国主義打倒への回路に導くところの先駆的役割を担ってきた。しかし、新左翼諸党派はこれらの大衆自身がつくりだしてきた闘いの質を、根底的な形で組織的に内実化し、独自の運動、政治領域として包括していくことを拒否してきた、というより、もはやそれらの闘いの過程において、そうした階級闘争の質的転換に対応しえない歴史的限界性を露呈したといえるのであった。つまり、国家権力との直接的対峙関係を媒介にして、階級関係の流動化を促し、その闘いの同心円的拡大をはかるという階級闘争への主体的関与は、

たのであり、ブント十余年の歴史的総括からの回答でもあった。

だがしかし、われわれが論理性において権力闘争の実相を透視しつつも、同盟の政治的領域を大衆闘争を媒介にして実体化していくところの実践的・政治的方針の確立まで到達しえないのも事実として明らかにされた。

6・14、6・15の連続闘争を闘うにあたって、反革命包囲網打破の政治スローガンを掲げつつも、このスローガンこそ、今日の国際的、国内的政治状況をリアルに表現するものはないが、組織方針として実体化される諸戦線に対する具体的政治方針を提起しえなかったことが、6・15統一行動を同盟の狭い枠においてしか闘いえなかった要因となった。これは、いまわが同盟が厳しく突きつけられている課題にほかならない。

反革命包囲網打破を地を出撃拠点にして闘い抜け!!

6・14、6・15の連続闘争は沖縄闘争の敗北過程において闘われた。われわれは沖縄闘争の政治的敗北過程の進行は、同時に日本における権力再編が市民社会内部において反革命包囲網の形成にまで進展していることの、重大な表われとして位置づけた。ブルジョア政治過程がたんに政策レベルで勝利者的に進行したのではない。"沖縄返還"がほとんどなんの障害もなくなしとげられたのは、沖縄人民の突出した階級闘争を、権力闘争として突き進む道を閉ざした日本国内におけるプロレタリア人民の、9・16闘争で闘いとった質を全国的な規模で実践的に闘いとることのできなかったところに最大の原因がある。

反革命包囲網はその国際的規模における国内的反映でもある。ベトナム革命闘争がつくりだした帝国主義陣営内部の政治的・経済的動揺の深化は米中、米ソを中心とする支配再編をもたらした。これはベトナム人民の闘いを一層困難にさせ、勝利への道程を長期化させるものとなっていることは言うまでもない。それは同時にベトナムにとどまらず、帝国主義支配体制及び「社会主義圏」におけるプロレタリア人民の闘いをも、一層厳しいものとしていることは明白であり、われわれはこうした世界的規模での権力再編が、政治的、軍事的に反革命包囲網として形成されていくことに対し、世界的連帯を闘いとるなかで粉砕していくことが求められている。とくに日本帝国主義の海外侵略—水平分業及び垂直分業の併存体制—は国際市場戦の激化のもとで、一層激しくなっており、それが国内における経済的構造再編—労働力市場の国家的掌握業—及び政治的再編の急展開となっている。これは当然にも、日帝の被侵略国内の階級闘争への直接的関与を不可避とせざるをえない。それ故、日本プロレタリアートの国際的連帯はすでに現実のものとなっている。とくにベトナム人民の闘争は、それが世界的同質性を有しているが故に、日帝と米帝の矛盾も、国家間の全面的な対立関係を抑止せざるをえない現実をつくりだしている。したがって、アジア人民の共通の課題は、日米両帝国主義及びその政治的・経済的利害の表現者である軍事政権に対する闘いとなるのは当然であろう。またベトナムがそうであるように、これらの人民の闘いは、プロレタリア権力闘争へ向うことを通して、はじめて自己を国際的階級闘争の位置へ押し上げることが可能となるのだ。

したがって、日本のプロレタリアートの任務は、これらの人民の闘いをそうした方向へと決定づけるところの恒常的権力闘争の展開と組織的連帯をかちとることにある。すでに世界階級闘争の枠がいまや単に観念ではなしに、現実のものとして、われわれの目前にあることをはっきりと認識されなければならない。世界的規模での反革命包囲網の形成に対

して、世界プロレタリアートの革命戦争、革命的連帯、権力闘争をもって応えなければならないのだ。

この点に関しては、わが同盟はいまだ抽象的段階からしか提起していない。だからこそ目的における被侵略国人民の日帝の抑圧、差別に対する積極的取り組みが立ち遅れる根源ともなっている。プロレタリアートに国境はない。6月造統闘争は、こうした視点を大胆に打ちだすことを通して、世界階級闘争に対する同盟の国際的任務を明確にしなければならなかった。

ところで、大衆の政治的位置を反革命包囲網打破という形で表現してきたが、これをどう具体的に、階級闘争の質的転換のなかで実践化するかである。

権力再編をたんに上部構造の質においてのみ把えることは重大な誤りをもたらすことはすでに指摘してきた。したがって、権力闘争の内実をストレートに権力機関に対する闘いとすることにも反対してきた。われわれは、権力再編を一方では社会再編という形で表現してきたのはそのためである。

大都市中心に工業基地化をはかり、労働力を農村から供給するという再生産構造は、都市の過密化をもたらし、公害ばかりか、地価の騰貴、労賃の高騰を加速し、膨大な第三次産業の成長を促してきた結果、都市には流民化した大衆が蓄積されるところとなった。

これは、企業への帰属意識を持たない大衆を、また組合では、企業別であるが故に企業を前提とした闘いからの枠でしか経済闘争一つとってみても闘いえないことからくる無力感が、労組員となることを拒否する大衆をもつくりだし、支配単位としての職場での支配の枠の外に自らを置くことになった。これは資本にとっても、権力にとっても政治的不安定要素以外の何者でもない。これらの部分が左翼から政治的に組織され、学生との政治結合をもった場合の階級的力量をもっとも恐れたのは資本、権力であった。この間の闘いで、学生と労働者との分断を気狂いじみて行ってきたのはそのためであった。

しかし、権力支配＝暴力的圧殺を強行しながら、他方においてブルジョア、権力は、新全総、日本列島改造をもって、労働力の国家的掌握（春闘は賃金の産別横断化を促進し、その地ならしとなっている）全国の生産基地化、都市間の均質化に着手しようとしている。これは、都市流民化傾向に歯止めをかけ、労働者大衆支配の再編に本格的に取り組むことを狙っている。公害企業の都市撤退を奨励するのはそのためであり、それを公益という形で果たそうとするイデオロギー攻撃がかけられてきているわけだ。

また、経済的支配の強化は、大衆の相対的

化を強めている。国際管理通貨体制が事実上崩壊し、世界経済は恒常的危機に見まわれている。インフレの波は恒常化において世界の常識となり。世界的景気波動を通貨価値の操作により、辛じて調整しているが、そのしわよせを大衆に転嫁するなかで価値増殖をはかっている。つまり、大衆収奪をその体系の基軸にまで高めてきている。しかも、しかも国家による通貨及び公共料金の操作を通じてなされているところに基本的な特徴がありそこに帝国主義の腐朽化の姿を見ることができる。

以上のことから、大衆は24時間の搾取と収奪体制のもとに、いわば生活総過程を権力と資本による政治的・経済的管理のもとに置かれつつあるといってよく、この傾向は一段と強まらざるをえないのだ。もはや、個別資本内部において語られる問題は無いに等しい。春闘が年々諸要求化しつつも、無力化する必然性がある。こうした状況は大衆の旧来からの存在様式の転換を迫るものとなるのは当然である。旧来の組合的団結や議会を通しての政治参加においては生活総過程の管理体制とは対決しえないからであり、全く新たな大衆

的団結様式を闘争主体として自己を形成していくなかでつくりだざざるをえないからである。そして、生産点、居住地総体を自己の闘争対象として位置づけていかざるをえないのである。

逆にいえば、組合的論理や枠において闘いが組まれたとしても、それを突破せざるをえない、つまり、支配秩序に対する公然たる叛乱として階級存在をかけざるをえないということである。こうした闘いは、地域的規模で発生する。権力再編＝社会再編は中央集権的内実を有しながらも、市民社会の地域的分解とその掌握を前提としている以上、矛盾は地域において集中化せざるをえないからである。

ここに同盟の地区同盟化の根拠がある。したがって、地区において大衆暴力闘争の組織化をはかる中で、個別の闘いを連環させ、中核闘争として合流させていくことにおいて、権力闘争の展望を打ち立てなければならない。地域を出撃地点とする中核闘争をもって反革命包囲網打破を闘い抜いていかなければならない。したがって、地区は中央との関係において、たんに機能的に考えられてはならないのである。

地区同盟は、地域において、同盟の政治的思想的影響力を強め、労働者、市民、学生等あらゆる階級のなかから、同盟の組織的枠において、権力闘争のいかなる形態をも担い切る革命的暴力部隊の形成をはかりつつ、それらが地域における大衆的暴力闘争への大衆的指導を担うオルグとして機能させていくところの政治指導を貫徹しなければならない。

六月闘争の組織的総括

わが同盟は、今秋期闘争における新たな革命的潮流の形成に向け、6・14～15の連続闘争を準備した。そして、我々は権力再編によって進行する反革命包囲網の打破という意識的大衆にとっての共通課題であり、かつ今後長期にわたるであろうそのための闘いの陣型を作る為に6・15闘争委員会の結成を呼びかけた。また、それは同時に、すでに明らかなように、全左翼戦線の混乱と、内部分解によって多くの先進的活動家が喪望を失い、戦列から脱落ないしは後退している状況に対し、自らの階級的責任において、こうした状況を転回させ、大衆的暴力＝大衆的政治同盟を形成していくこと、また旧来の新左翼政治のせまい枠をこえて、闘い抜いている各地の地域闘争の主体の政治的結集を図る事、また統一行動から統一戦線の形成を展望していく事を具体的任務として設定されたのである。

しかし、我々はここに率直に、闘争委員会を我々の意図通りに形成しえなかった事を明らかにしておかなければならない。

我々にとって、6・15闘争委員会とは、明確に、大衆的政治同盟の萌芽として、従って地区同盟の建設という方向性をもったものとして形成されるべきものであった。そして、6・15闘争委員会がそのようなものとして形成されつつも、しかし、大きな限界を有していた事の原因を明らかにしておかなければならない。

69年安保決戦の敗北と、連合赤軍派の無惨な壊滅に示される新左翼運動の直面した極めて困難な状況の中で、我々は6・15闘争を提起した。しかし、「反革命包囲網打破」に向けた統一行動の提起は、その正しさ、正当性にもかかわらず、極めて大きな限界を有していた。すなわち、いかにして、反革命包囲網を打破していくのかという問に対して、我々は、地区における大衆的政治叛乱の創出と、地区同盟の建設という方向を提示しつつも、我々の地区における実体形成の立ち遅れ、また反革命包囲網を打破し、権力と対峙していく権力闘争の時代の陣型構築と統一行動を可能にする具体的な統一基軸の形成における不充分性、不完全性を持たざるをえなかった我々の弱点を厳しく総括し、自らの到達した地平の現実的な政治方針を、実践方針へと確立しなければならないだろう。

我々は、同盟の全力量をあげてこのことを早急になしきるであろう。

60年代末以降の階級闘争の諸局面をその最前線に担った労働者、学生、農民、市民の戦士が、混迷と低落の中でも闘いの思想性、政治性を堅持し、今尚職場で闘い抜いている。それは、新たな労働運動における階級戦線を形成しつつあり、地域においても形成を開始している。この闘い、大衆的闘争意識と無関係であるが故に現在の新左翼運動のおかれている危機的状況を自らの責任として突破してゆく新たな戦闘を必ずわが同盟は創出する事を、全ての同志諸君の前に明らかにしておきたい。

ローテ　第16号（¥50円）

編集・発行＝　ローテ編集局

連絡先　＝　日本企革社
電（200）3422